

聖書日課 『からし種』 2024.10.27-11.3

<p>10月27日 (日) エゼキエル 19章</p>	<p>「この歌は悲しみの歌。悲しみの歌としてうたわれた」(14節)。獄中で命尽きる王たち、焼け落ちていく都。かつては自らを神の宝の民(申命7:6)と信じ、他国と戦い領土を奪って建てた国は、その神の「怒り」を受けて他国に滅ぼされてしまった。この事をうたう「悲しみ」の歌。預言者は神の「悲しみ」を託されているからこそ、神の「怒り」を大胆に語れるのだろう。</p>
<p>28日 (月) エゼキエル 20章</p>	<p>「彼らにわたしの掟を与え、わたしの裁きを示した。人がそれを行えば、それによって生きることができる」(11節)。エゼキエル書のテーマは「生きる」。人知を超える神の掟(判断基準)と裁き(意思決定)に生きるため、旧約の人々は日々伝える「出エジプト」の歴史を拠り所とした。私たちは「イエス・キリストの十字架と復活」を繰り返し思い出し、拠り所としたい。</p>
<p>29日 (火) エゼキエル 21章</p>	<p>「人の子よ、呻け。人々の前で腰をよろめかし、苦しみ呻け。人々があなたに、『どうして呻いているのか』と問うならば、彼らに答えて言いなさい」(11-12節)。社会の危機的状況を全身で訴える預言者の呻きは、神の呻きそのものだろう。それに対してポカンと「どうしたのか」と問う人々。いや、この私は問うことすら避けて、通り過ぎようとしていないか。</p>
<p>30日 (水) エゼキエル 22章</p>	<p>「この地を滅ぼすことがないように、わたしは...石垣の破れ口に立つ者を彼らの中から探し求めたが、見いだすことができなかった」(30節)。それでも「この地を撃つことがないように(マラキ3:24)」という神の願いは旧約の終わりまで続く。そして、私たちと神とのつながりという「石垣」の破れ口に立つ者として、神の子イエスが人となってその地に立たれた。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.10.27-11.3

<p>31日 (木)</p> <p>エゼキエル 23章</p>	<p>「彼らは憎しみをもってお前をあしらい、労苦によって得たものを奪い、お前を裸にして捨てる(29節)。本章は、古代の南北イスラエルがそれぞれ軍事外交に失敗して大国に滅ぼされる過程を恋愛関係に例えているのだが、戦争が当然とされた時代の小さな国々を思っても、男社会の中での女たちを思っても悲しい。キリストの平和が世界に行き渡るように。</p>
<p>11月1日 (金)</p> <p>エゼキエル 24章</p>	<p>「あなたは彼らに対してしるしとなり、彼らはわたしが主であることを知るようになる」(27節)。旧約の預言者は、皆がこれから受ける苦しみを先に体験して、神から人への警告のしるしとなる人であった。十字架で私たちの全ての苦しみを先に体験され、復活で神の救いのしるしを示されたイエス・キリストは、まさにまことの預言者であると知らされる。</p>
<p>2日 (土)</p> <p>エゼキエル 25章</p>	<p>「彼らはその復讐によって、大いに罪を犯した」(12節)。本章も悲しい話。長年互いに争ってきた国々が、新興の軍事大国に次々と食われて行く。先に滅ぼされた仇敵を嘲っても、次は自分。2020年頃の世界的なコロナ禍当初、国々が互いに批判し合い国際協力が進まなかったことを思い出す。預言者は、一つひとつの国に顔を向けて神の警告を伝える。</p>
<p>3日 (日)</p> <p>エゼキエル 26章</p>	<p>「それゆえ、主なる神はこう言われる。ティルスよ、わたしがお前に立ち向かう」(3節)。ティルスは南ユダ王国の隣の国。両国はアッシリアやバビロンの軍事侵攻の脅威に対して、時に連帯し、時に対立して歩んできた。けれども真の意味でティルスに立ち向かっていたのは主なる神だったのであり、彼らは主なる神の声をこそ聴くように招かれていたのである。</p>